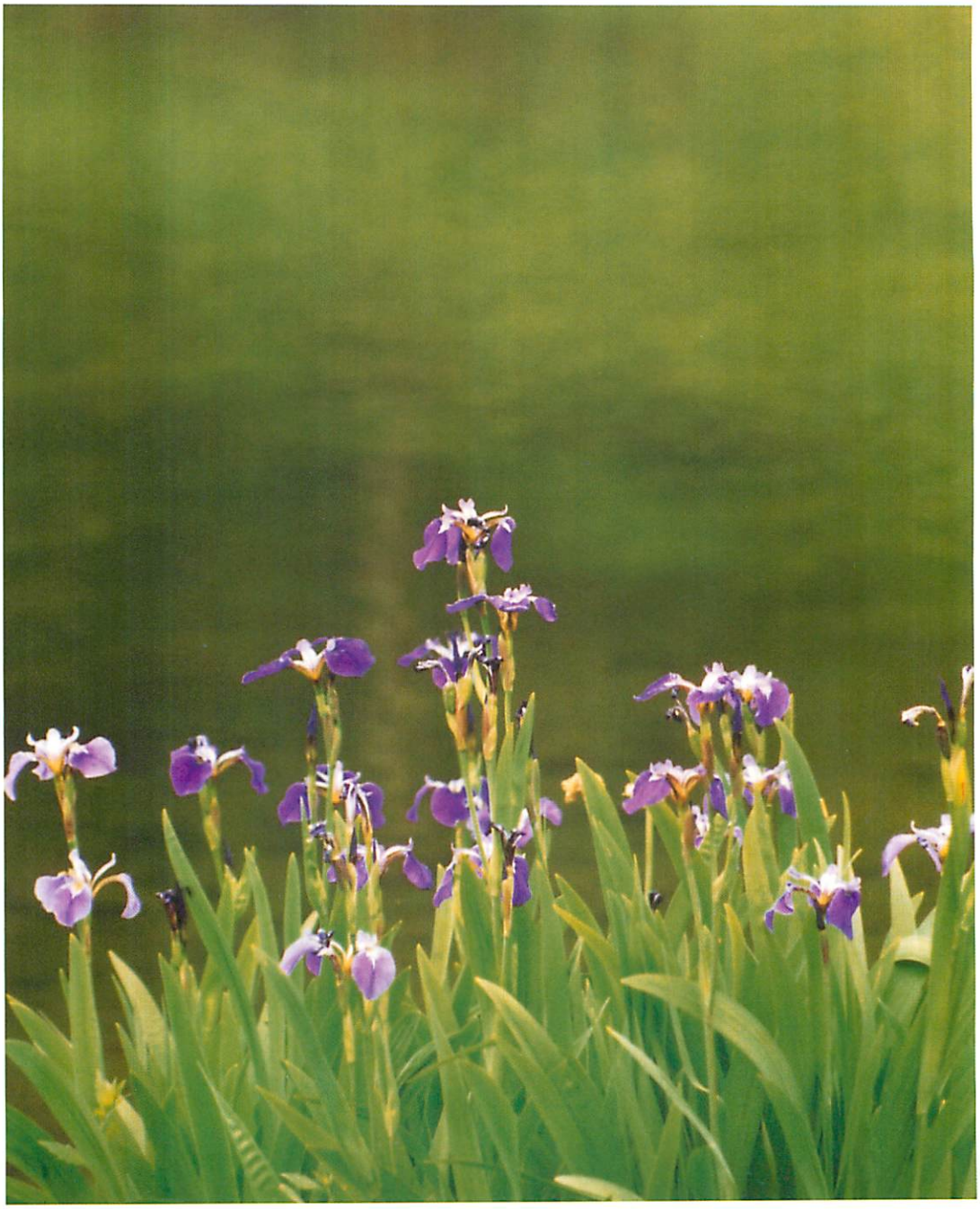
SHINGON HORONIC

色は匂へど

IRO WA NIO E DO



特集　香道の雅な世界

平成十年文月一日発行　巻七

矜持

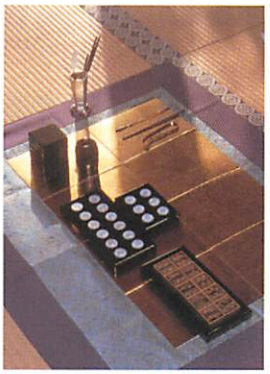
盲導犬を最近街で見かけます。
盲導犬は飼い主に絶対服従です。
しかし絶対拒否をすることも
また盲導犬の使命です。
飼い主のために人をよけ、車に注意し
信号待ちをする。このとき飼い主が
『渡れ、進め』と命令しても
信号が赤の時、また青でも車が来るときは
絶対に動きません。
ここに盲導犬の誇りがあります。

盲導犬は生後一年間、仲の良い家庭に
あずけられます。
そして愛情をたっぷり注がれてから
厳しい訓練が始まります。
愛情のない家庭で育った犬は盲導犬には
なれません。

ただ甘やかされて、お菓子の音ですぐ
来るような犬もなれませんが。

編集主幹　阿部龍樹

日本の心と形 3



特集
香道の雅な世界 5

子どもと楽しむブルーベリージャム 9

現代の道しるべ 11

大塔建立と武原はん 13

新刊紹介 『空海入門』竹内信夫著 ちくま新書 17

日本のこころと形

七夕とお盆は夏の二大行事
七夕は天空に輝く
二つの星の出会いを願い
短冊には
自分の未来を願います
お盆には自分たちの命の源
遠い先祖まで供養の心を捧げ
頂いた命の尊さに
感謝しながら
合掌しましょう

PHOTO SHU FUJIWARA

今年の世田谷区岡本民家園の七夕とほたる祭りは　7月4日
池のほとりを自生のホタルが自由に舞う
手にホタルがとまると子どもたちは大喜び
世田谷区岡本民家園　世田谷区岡本2-19-1　電話03-3709-6959

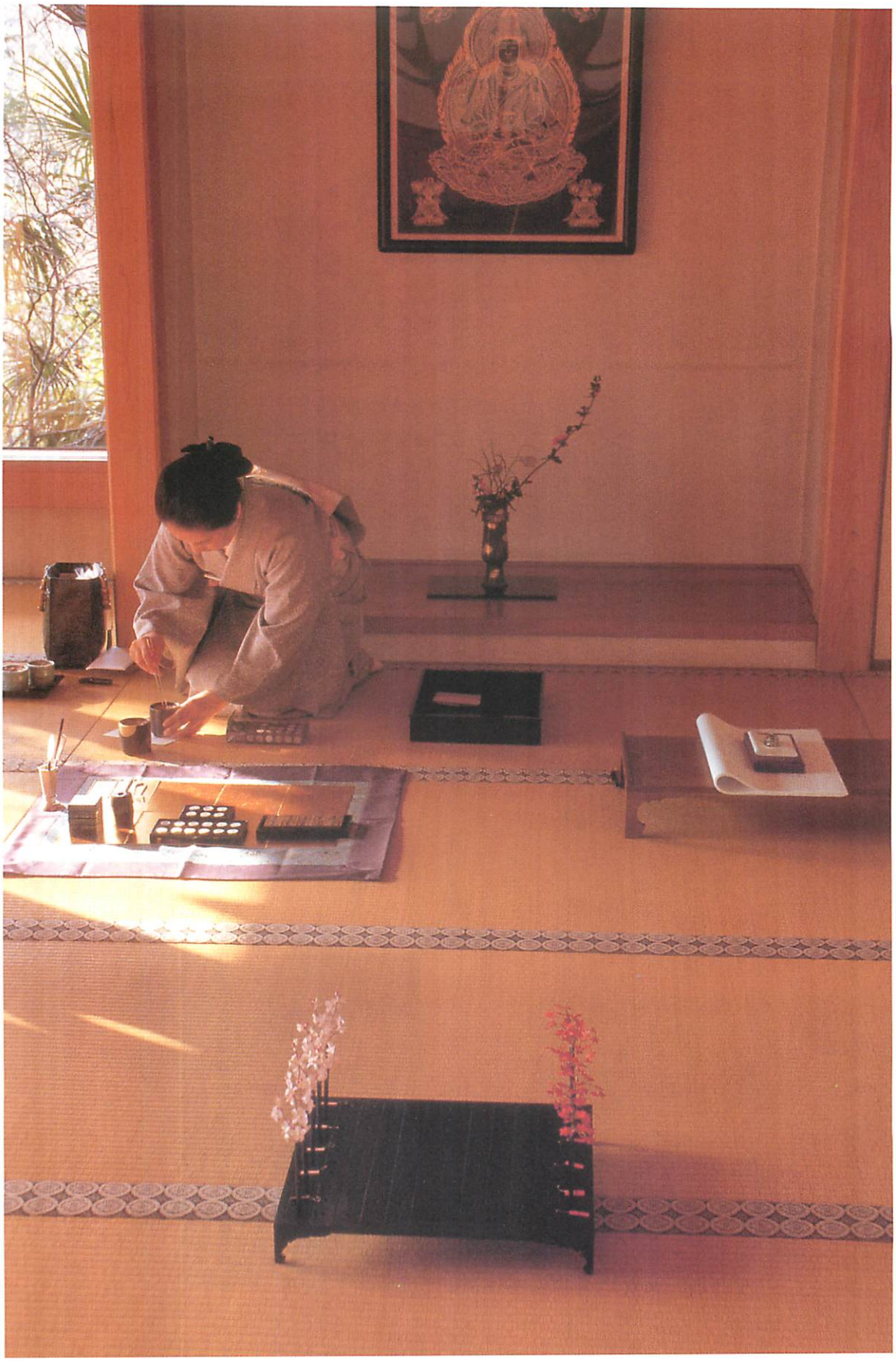
PHOTO MASAHARU YOSHIMURA

特集

香道の雅な世界

仏教とともに日本に伝わった香　やがて独自の雅な香道へ

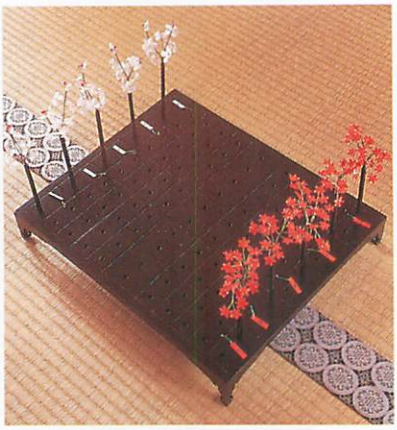
写真　吉村正治



連衆が入る前に香元が香炉に火を入れ用意をする。この火加減でその日の会の善し悪しが決まる。

緊張した時が流れる。

お香の歴史は永い。仏教の伝来とともに、日本に伝えられた。
仏教では香は、いつまでも薫じつづけることから精進の象徴とされる。
香を焚くとき、その場が浄化され清浄な結界が拡がる。
また身に塗る塗香は心身をともに清め修行者を励まし、災いを払い修行者を守る。



桜の吉野方と紅葉の龍田方
その美しさの優劣を香で楽しむ

奈良　正倉院御物にも多くの香木が伝えられている。中でも蘭奢待は最古の世界一の名香として今に伝えられている。
『供香』。この時代は香を焚き、仏菩薩へ供える供香がおもであった。
遣唐使の往来とともに日本に伝えられる香は多くなり、仏教の世界から貴族の世界へと拡がる。

平安時代になると様々な香が輸入され、それに合わせ香の世界も多様化する。
『煉香』『合香』さまざまな香材を選んで練り合わせたり、
『空薫』香を焚き、その香りを部屋に充たし、あるいは着物に焚きしめ、香の薫りそのものを楽しむようになる。
やがて源氏物語に代表される雅な世界から、武士の中にも拡がり鎧や兜に香を薫きしめ戦場に赴くようになる。

室町時代になると練り香だけでなく、香木そのものの薫りを楽しみ始める。
『名香合わせ』香木を持ちより、薫りを競う。
『名香聞』すぐれた香木の薫りを鑑賞する。
『焚継香』持ちよった香を焚き継いで、連歌のように楽しむ。
やがて香は茶や花とともにひろく町人にまで広まり、日本の文化を形ずくる。

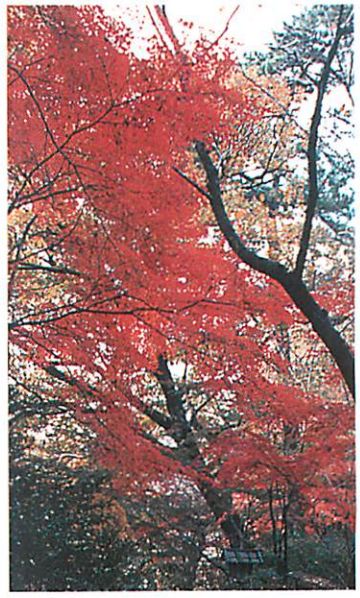
香元が心をこめて　香炉に香木を

ご夫婦で、親子で友人と一座を楽しむ

香の楽しみ方は
六つの国から渡った香を聞く。
『伽羅』（ベトナム）
『羅国』（タイ）
『真那賀』（マラッカ）
『真那蛮』（マナンバール）
『寸門多羅』（スマトラ）
『佐曽羅』（サッソール）

香道はけっして、香りの当たりはずれを競うのではない。
香の薫りとそのときの銘を通して、日本の四季のうつろいや、花鳥風月の趣に心を向けていく。
香薫りを嗅ぐとは言わずに『聞く』という。
はじめはなぜ『聞く』なのだろうと思うが、一度、香席に入ってみると、なるほどと思う。香炉を両手でいただき、ゆっくり眼を閉じると自然と耳を『澄ます』。
そのとき遠い吉野山が浮かび花の散る気配が感じられたり、山を渡る鶯の声が聞こえたり、また龍田川の川の流れる音と紅葉の美しさを感じたりできる。
香を『聞く』と、とても懐かし薫りがする。
耳を澄まし心を澄ますと、日本人の心の原風景が薫りとともに見えてくる。

取材協力　香道　古心流　黒須秋桜



香炉をゆっくり　三息で聞く

美しく書き上げられた香記

子どもと楽しむ
ブルーベリージャムずくり

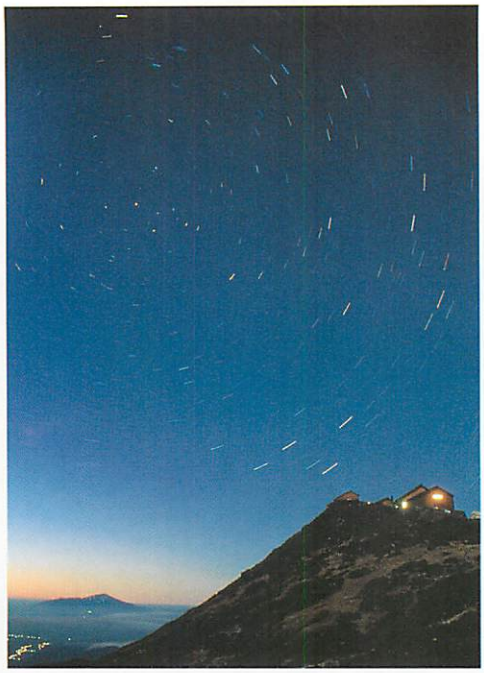
ブルーベリーは春に
可憐な花をつけます
そして夏の日差しを
いっぱいに受け
夏の終わりから
秋にかけて
たくさんの実が
実ります

PHOTO&TEXT SHU FUJIWARA

その実をつんで
ジャムを作ります
ブルーベリーは
眼にとてもよい果実です
子どもと一緒に
ブルーベリーを摘み
ジャムを作る
楽しい休日が過ごせます

現代の道しるべ

仏教とは苦を超える教え



前向きに生きよう。ポジティブがいい。
それは誰にでも分かっているが、それができないから悩む。死にたいほど悩む人に「前向きに生きようよと」といっても、前向きに生きられないから『死』を考えているのであって悩む人はそんなに簡単に出口を見つけられない。
お釈迦様も深い悩みの中から出発している。

生まれるとはなにか、
生きるとはなにか
老いるとは
なぜ病むのか
そして死とは

この悩みはけっしてお金や物では解決しない。

お釈迦様は現代人では手に入らないほどの富と豊かさの中に暮らしていた。
夏には夏の宮殿があり暑さを逃れ、冬には冬の宮殿があり寒さを知らず。美しい后に可愛い子供、多くの臣下や官女たち。望むものはすべて手の中にあった。
しかしお釈迦様の心の悩みは癒されなかった。

心の渇きを潤せない現代人や、他人を傷つけることでしか自分の存在を確認出来ない子供達に
「前向きに生きなさい」といっても答えにならないだろう。
マスコミに登場する教育者や評論家の
「ありのままの自分で良い、自然体が一番良い」
この言葉も耳に心地よく響く。
しかし『ありのままの自分』それがわからないから実は一番困る。
『自分探し』という言葉を最近耳にするが己を見失って漂流する現代人がようやく自分をさがしはじめた。

真言密教には『如実知自心』というキーワードがある。
実のごとく自らの心を知る

まず自分をしっかり見つめてみよう。
それでも自分は見つからない。
自分の心を探してみよう。
はじめは欲ばかりが見えるかも知れない。
恋人が欲しい、お金が欲しい、ピアノが欲しい、課長になりたい、社長になりたい、愛されたい。
それが本当に必要かどうか真剣に考えてみ

る。
真剣に考えてみると本当に必要なものではなかったり、ただ友達が持っているからとか、あるいはその時の心の虚しさを埋めるためであったり、意外に目的がほかにあったりする。
本当に欲しいかどうかわからないもの、そのすべてを手に入れても、幸せにはなれない。

本当に自分の欲しいものも望みもわからない子供達に
『ありのままの自分でよい』といえばそれは
『本能のままに生きろ。』
『動物のように生きろ。』といっているようなものだ。
何を望み何のために生きるかわからない。
わからないから、心の寂しさを埋めるために自分を傷つけたり、心の空洞を埋めるために人をあやめてしまう。

お釈迦様は一切皆苦といわれた。
生まれることも
老いることも
病むことも
そして死ぬことも
これらを四苦という

さらに
出会う者が必ず離別する苦しみ
憎み合う者が同じ世界に生きる苦しみ
求めるものが手に入らない苦しみ
世界を造るものすべてが苦の因になる

これも四苦という
前の四苦とあわせて八苦

まさに人生は四苦八苦で苦しみの連続だ。
人生は苦を負う茨の道かも知れない。
たった一人で生まれてきて
たった一人で死んで逝く

そのことをしっかりと自覚し、その中で自分を見つめることではじめて光が　見えてくる。
人の暖かさや温もり。出会いの尊さ、縁の不思議。生かされていることの尊さ。
大きな世界とのつながり
あらゆる生命との一体感
その中に生かされている小さな自分
しかしけして孤独ではなく
常に何かに支えられている生命

その時、はじめて他者への眼差しがはっきりと変わるだろう

生まれてくる者への愛
老いる者への敬いと
病む者への慈しみ
そして逝く者への感謝が
湧いてくる。

PHOTO MASAHARU YOSHIMURA

大塔とおはんさん

文　転法輪　一

おはんさんの名で親しまれた地唄舞の名手、
武原はんさんが亡くなられた。
九六才。
平成二年の大塔の落成慶讃法要にぜひ舞を奉納されたい
と申し出られ、おはんさん独自の美しい舞が舞われた。
最初に仏塔に合掌され、舞おわると再び合掌され深く
礼する美しい姿が参列者の心に深く響いた舞であった。

おはんさんは四国徳島市駕篭屋町に生まれた。
徳島はお大師さまのお膝下。
生家も真言宗でお大師さまへの信仰は幼いときから身に
付いていた。
しかし舞を舞うようになっていつしか
『舞佛心』という言葉が浮かぶ。
昭和七年から写経を始め観音経、般若心経、法華経など
晩年まで続く。
昭和一四年から始めた御嶽詣は一七年間続けた。
納めの御嶽詣の時に記念の句碑を奉納する。
九一才でお四国八十八カ所参りを発願され四回に分け、
翌年の秋高野山に登り成満。

おはんさんの一日は祈りから始まる。
朝身仕度をし、東の空に向かい「日天さんを拝む」
それから稽古場に行き能「翁」のトウトウタラリと四方
にうたう。

さらに舞台で神棚の扇を頂戴して能の
「乱拍子　急の舞」をさらう。
ここまで二時間。日課で欠かさない。

千日花供養。
おはんさんは願をかけて何度もこの行を勤めた。
千日間、毎日違う花を仏に捧げ写経をする。
その花の名と日付も入れる。
拝見するとゆうに千日を過ぎている。

まさに佛心のなかに生きられた方。
一昨年、六本木の舞台にお邪魔して多分最後の
舞台での姿を拝見させていただいた。

扇を取り舞台に立たれる。
美しい清浄なお姿。

最後にお会いしたのは、昨年の正月。
等々力不動尊に初詣に来られたとき。
至心に手を合わせいつまでも祈る姿が
仏さまのようだった。

舞佛心

ご冥福をお祈り致します。

躾が肝心。

躾は身が美しいと書く。美しい身でもよい。これほどエステだ美容だと汲々としても基本があっての上のこと。傾いた土台の上には美しい建築は成り立たない。美しくなりたければまづ基本的な躾とルールを身につけることだ。それを身につけている人は実に魅力的だ。その魅力は年を重ねるほどに輝いてくる。１５頁に紹介した武原はんさんも本当に晩年まで美しかった。

この躾がしっかり出来ていればそれだけで立派な国際人だ。世界中どこへ行っても困らないと思う。逆に基本的な躾が無ければ野蛮人と見られても仕方がない。

そして世界はけっして平等でも自由でも平和でもないことを最初に教えよう。

努力する、挑戦する機会がせめて平等になるような社会を目指すのであって、朱発点も結果もけっして平等ではない。社会はそういうものだ。小学校の運動会で徒競走の順位を着けると差別につながるので順位を決めない学校がある。　それが本当に平等な社会に繋がるはずもない。

今の陰湿な『いじめ』の一因がここにある。

日の丸と国旗と国歌。

先日長野オリンピックが大きな感動を呼んだ。それ以上にパラリンピックは素晴らしかったが。さてそのオリンピックで日の丸が掲揚され君が代が吹奏されるとき、日本の選手が帽子をとらいとらないことが話題になった。これも教育の問題だが、これはいけない。

あるバラエティー番組でのひとこま。アメリカ､ユマでキャンプ中のヤクルトの野球選手が君が代を独唱するらしい。その時、アメリカ人の観客は全員立ち上がり、胸に手をおく人も多く見られたが、反対に日本人の多くの観客やスタッフは座ったままふざけあう。この姿を見た世界の人々は野蛮人をそこに見るだろう。いくらバラエティー番組とはいえ。自国の国歌、国旗への敬愛は世界百数十カ国の共通常識で、自由主義の国から、社会主義、共産主義まで変わらない。それは自分の家族に対する感情と変わらない。

だからどこの場でも国旗が掲揚され、国歌が歌われるとき、直立し帽子をとり、人によっては胸に手をあてる。その姿勢や気持ちは他国の国旗や国歌の場合はなお大切だろう。

国際試合で日本の選手や役員達が自国の国旗や国歌を軽んじ、まして相手国の国旗掲揚、国歌吹奏の時、あくびをしたり笑い合う姿を見れば、世界の人々はどう思うか。

そろそろワールドカップサッカーが開幕していると思う。サッカーやオリンピックの試合で、日本へのジャッジが厳しいとかアンフェアーという声も耳にするが、こうしたことが一因でなければ良いが。

日の丸と君が代は戦争につながるから絶対反対という人々がマスコミや教育関係者の共通認識らしいが、一時の戦争と日の丸、君が代を無理に結びつけ固定化する方がよほど危険だ。

まして長野オリンピック委員会のように、日本選手が金メダルを獲得したとき、選手団の旗を掲揚し選手団の歌を吹奏しますと言うあざとい詭弁が世界に通用はしない。もしどうしても反対なら国民投票でもして決着すればよい。

ルールはより良く生きるため。

先日埼玉の高校で「入学式に出席しない生徒は、入学させない。」と語った校長先生がマスコミからたたかれていた。そしてその高校では生徒たちの自主的な新入生を祝う会が行われるので校長主催の入学式は必要ないという意見がまかり通っている。。驚くことはＰＴＡの多くも校長の意見に反対で、また生徒たちを支持する弁護士の会まである。ニュースステーションのコメンテーターも「自主的な祝う会は素晴らしいじゃないですか」と一方的に校長批判をしていたようだが、どんな組織にも社会にも基本的なルールがある。

ルールとはそこに集うもの生きるものが同じ時間を共有するうえで、お互いにより快適に暮らすためのもっとも基本的なそして大切な約束事だ。その約束事を学ぶ場が、家庭であり学校だ。

挨拶から始めよう。

人生はめんどくさい。朝おきて髭を剃り顔を洗う、歯を磨く、挨拶をする。しかし生きると言うことは、そのめんどうな小さな一つ一つの行いの積み重ねだ。

ある本の中でＣ・Ｗ・ニコルさんの話として

『南極など極限の地で風雪と氷の中何日も動けないときがある、そんなとき最後まで自分を見失わずに耐え抜けるのは一見頑健な山男では無い。そうした極限状況でテントの中だと人間誰しも不精になり身だしなみにも気を使わなくなる。それでもなかには朝起きて顔を洗い髭を剃り髪も整え、顔をあわせると「おはよう」とあいさつをし、物を食べるときは「いただきます」という人もいる。こうした社会的なマナーを身につけた人が意外としぶとく最後まで弱音をはかない。』ひとつの行いを積み重ねることが明日への糧になる。

そして挨拶することはとても簡単にできる。

親子でも先生と生徒でも会社でも。挨拶がきちっとできれば一日の始まりはとても気持ちよい。入学式は学校と先生と生徒と親の最初の挨拶の場にほかならない。

自主的な新入生歓迎をあおるマスコミ各社も入社式はかならずしているはず。

自由は不自由

先日テレビで、ビートたけしこと北野武さんが裏千家の家元の茶事に招かれるという番組が放映された。亭主は千宗室家元、客は北野武さん一人。一客のために家元は一月も前から準備をする。

しかし北野武さんは茶道の経験は全くない。東京で稽古をし、京都では一期一会の茶事が終わった後に、北野武さんは『お茶は、ここを十歩で歩けとかさ、いろんな細かい所作や決まり事がある。その十歩をどう歩こうかというところにその人の想像力や自由があってね。

それを全部とっぱらて好きにやれって言われたら困っちゃうね。』

今の子どもたちは、自由が大切、個性を伸ばそう、子どもの人権を絶対に守ろうという言葉に踊らされて、じつはなにをどうやって、何を基準に生きていけば良いかわからない状態になっている。　まづ自分をしっかり確立した上で、自由とか個性とかの話が出来る。

そして大切な自分と大切なかけがえのない自分の生命、そこがわかってはじめて友達にも他人にも優しくなれるはずだ。

新刊紹介

『空海入門』弘仁のモダニスト
竹内信夫著　ちくま新書

弘法大師空海を書いた多くの著作の中で、専門外の方が書いた本に光る作品が多いのはなぜだろう。著書竹内信夫氏の専門はフランス語、フランス近代詩、比較文化論を講じる、東京大学大学院総合文化研究科教授でありマラルメ全集やレヴィ・ストロースの翻訳などをものにされている。

弘仁のモダニスト　山と都市、高野山と平安京、唐代中国と日本、重なり合う複合的な磁場のなかで自らを形づくり日本文化の設計者となった天才的個性の生涯を著者自らのフィールドワークでとらえ直し繙いていく。

『空海入門』という題だが空海の深い世界まで導かれ読み了えたとき、巨星空海の輝きの一端がつかめるはず。

写真家紹介

『芭蕉紀行』　1・2・3
吉村正治撮影　グラフィックス社

前号の西行特集の美しい吉野の写真と今号では香道の世界を美しく撮影された吉村正治氏の写真集『芭蕉紀行』詩情溢れる写真と芭蕉の俳句が織りなす世界。芭蕉の生涯の足跡の季節に合わせて撮影されているのでいっそう興味深い。

『ＥＸＣＥＬ』によるナースドクターのためのデータ整理法
田久浩志著　　羊土社

パソコンで「色は匂へど」を編集していると、さぞパソコンに詳しいと思われるが、未だにパソコンの事はわからない。そこでパソコンに詳しい友人と解説書はとても大切だが、この本はお勧め。どの分野の仕事でもデータ管理ほど重要でしかもつまらない仕事は無い。データがしっかりしていればそこからいかようにも情報は得られるが、そこまでの作業が煩わし。それは人の命を預かる、ナース、ドクターも同じらしく、ドクター自ら書き下ろした、ＥＸＣＥＬによるデータ管理の解説書。著書が実際に看護婦さん相手に書いただけにわかりやすい。ナース、ドクターのためのとは書いてあるが活用範囲はものすごく広いはず。データ管理のための必読書。

『フランス＆サッカー最強三ツ星ガイド』扶桑社

『もう一つのワールドカップ燃えたぜ我らサポーター』日本文化出版

前号でラグビーの本を紹介したところ、サッカーファンから「なぜサッカーの本は紹介しないのか、しかも本年は日本がワールドカップへの初出場の記念すべき年。」という意見に答えて、数あるサッカー関係から二冊を紹介。

『フランス＆サッカー最強三ツ星ガイド』と『燃えたぜ我らサポーター』

私はスポーツは各国の異なる文化をトランスレートする一つの言語だと常々考えている。スポーツを通して開催国の文化や参加国の人々が互いに交流できることは素晴らしいと、思う。

『フランス＆サッカー最強三ツ星ガイド』はフランスという国をいまはやりのワインという記号を通して紹介するワールドカップの紹介本。

当たり前のような企画でフランス、ワイン、サッカーといえばあまりに安易な企画とも思われるが、スポーツをその国の文化と共に語り合うことは、グローバリゼーションの中では欠くことの出来ない姿勢だ。

『燃えたぜ我らサポーター』も新しい本の作り方として注目される。インターネットでサポーターから感想文を募るという。

いまインターネッや電子メールのなかで今までと異なる情報伝達が可能になり、その中では様々な会話や意見交換から議論までがなされ喧々囂々、百家奏鳴状態。良い意見ばかりではないが、マスコミが拾えない良い意見が沢山あり、しかもより本音に近い意見が交わされていることが大事。原稿用紙に向かう。受話器に向かうと構えたり、文章表現を気にするが、ネット上だとそうした気遣いが少ないのだと思う。

前者が扶桑社という大手マスコミ系列から出されるのに対して後者は一印刷会社の企画で、対照的な二冊の本だが、サッカーファンのみならず繙く価値は充分にあり。

さて２００２年の日韓共催のワールドカップにはどんな文化を盛り込めるか腕の見せ所でしょう。

PHOTO SHU FUJIWARA

この本はツリーフリーペーパーで作られています
さとうきびから砂糖を取り出したあとの　残った繊維から作られています

次回発行は９月１日予定

特集　ハウステンボスに見る未来都市

Editor RYUJU ABE　Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA　Spescial Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA
Editorial Staff / MIWA SAMURO　KOJI TOKUMARU EISHIN TAKAHASHI REIKO ONUKI　KAZUFUMI MOTOYAMA
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA　Making Mechanic SANMITUSHA Printing KORINKAKU
PUBLISHER RYUBUN ABE　EDITOR RYUJU ABE　EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158　東京都世田谷区等々力3-15-1　電話 03-3705-1622　ファクシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo　第一巻第七号　平成十年文月一日発行